



02 中津川行者堂 住所/紀の川市中津川地内

前鬼谷の里人たちが 守り伝えてきた 葛城修験の聖地、中津川

人の住む集落に近く、またその里人たちも積極的に修験者と関わってきた葛城修験。中でも「葛城中台」と呼ばれ、葛城修験の中心地とされてきたのが紀の川市中津川一帯である。その辺りは前鬼谷といわれ、特に役行者と関りの深かった里人たちが住んでいた。その子孫たちは西野、前阪、亀岡、中津川、中井姓を名乗り五鬼家と呼ばれていたという。それぞれの家の代表である老分と極楽寺の世話役を中心に、里人たちは行者堂での護摩供の準備や周辺の草刈りなど、修験者の接待を代々続けてきた。

神仏分離令に続き明治5年には修験宗廃止令が発出され、廃仏毀釈により仏像や修験道に関するものが多くが排除された。しかし修験道の歴史は、途切れることなくその後も続いた。「この村に住む者にとって、修験者たちへの接待は当たり前のこと。それが修験道と寄り添ってきた前鬼谷の歴史です。今はもう見かけなくなりましたが、昔は修験者へ無償提供するための草鞋を家の軒下にかけていました。修験者が歩く山道は険しく、普通の草鞋では1日も保たないのですが、中津川の草鞋は八ツ目草鞋といい、周囲に八つの結び目があり、丈夫で特別なものでした。それは山伏16道具と呼ばれる装具のひとつで、その草鞋を履き修行するということは、仏像が八葉蓮華の



01

台に乗っているのと同様に、聖な姿だといわれています」と語るのは五鬼家のひとりである西野初雄さん。

また葛城修験の修行を行う京都の聖護院は、山伏の位階を授ける「葛城灌頂」という重要な儀式を、この中津川行者堂で不定期に開催してきた。それは夜間に執り行われ、関係者以外の立ち入りや撮影を禁じられている秘密の儀式である。そんな重要な行場を管理してきたことから、中津川は聖護院の宮より官名を賜ったという。「当時の官名は特別なもので、中津川の村は年貢も免除され、苗字帯刀を許されたそうです。江戸時代では関所の通過などでもかなり優遇されたといわれています。」

樹々が生い茂るその里とそこに住む里人たちの記憶には、どこにもない歴史が息づいていた。



碑伝(ひで)とは、修験者たちが、自らの修行の証として山中の行場に納める木札のこと。名前と年月日や願文などが書かれている。

01>中津川では今も八ツ目草鞋作りが受け継がれている。02>物静かに歴史を語りかける中津川行者堂。03>「昔は行者堂近くに集落があったんですよ」と語る西野さん。今でも代わり代わり草刈りをしたり掃除をしたりとお世話を続けている。04>行者堂からさらに奥まったところにある熊野神社。役行者により開かれたと言われ、古くは行者堂前でなく熊野神社前で護摩供が行われていた。熊野修験と葛城修験の関係の深さが見える。



04



03



葛城山脈と紀の川は、人々の営みと神仏への祈りの交わる場所。

Special Interview

【丹生都比売神社宮司 ● 丹生晃市】

当社は、応神天皇の寄進により、古代紀伊山地の北西部一帯を神領地としていました。弘法大師に真言密教の根本道場の地・高野山を授け、神仏の融合した日本人の祈りの源泉があると世界遺産に登録されています。明治維新の神仏分離までは、神職・僧侶等総勢56人で守られ、周囲には堂塔が立ち並び護摩焚きも行われていました。修験道との関わりも深く、僧侶は当社の御神体を背負って葛城修験28宿を巡りました。帰社時の祭りが「神還祭(じんかんさい)」として今も残り、境内には役行者の祠、大峯修験者の護摩供の碑伝も現存します。鎌倉・室町時代には神輿は紀の川を下り、河口の玉津島神社まで神幸していました。大和朝廷成立後、当時の都から見ると和歌山と大阪と奈良の県境にある葛城山脈は身近な神々の山で、修験道はじまりの地となったのも自然のことだと思います。また、紀の川は古くからの水上交通路で、奈良と大阪を繋ぎました。この地は、まさに人々の営みと多様な神仏への祈りの形の交わる場所です。

7月18日「神還祭」 今年は「葛城修験」日本遺産登録1周年記念行事として、京都聖護院修験者による大護摩供も行われます。